



話題の本棚

平林克己、宮西建礼、岡田裕子著『京大吉田寮』

荒木優太編著『在野研究ビギナーズ』

特集／大学的読書事始め2020

新刊コーナー／私の本棚／ペーター・ハントケの世界

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seiyo/public_relations/



UNIV. 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

そこは秘境か、ジャングルか。

京大吉田寮

平林克己、宮西建礼、

岡田裕子著

草思社



京都大学吉田南キャンパスの南の果てに鬱蒼と茂るまさに魔境といつていい空間がある。聞くところによればそこでは昆虫たちが独自の進化を遂げ、真冬でもモスキートの羽音が至る所で聞こえるようだ。植物たちも住人と同じくらいひびのびと育ち、東南アジアを思わせる繁殖を見せながら、縄文杉もびっくりするほどの樹齢の針葉樹達が、日々人間の愚かさを嘲笑っているらしい。まさに現代に生きる腐海の森である。

そんな尾ひれはひれがついた噂の真相を確かめるために、この度カメラがそのジャングルの奥地へ入った。蘇る古代生物、屋上のミステリーサークル、閉ざされた防空壕。時の流れとは不思議なものである。なんでもなかった木造建築の建物が、一〇年、二〇年……百年と経つうちに神話と伝説を帯びていった。決して立ち入ってはいけない幽霊部屋、中庭に埋められた焼夷弾、印刷機が存在しない大きすぎる印刷部屋。ページを捲るたびにフィクションとノンフィクションの垣根が崩れ、あなたの脚は吉田南キャンパスの南の果てへと向かってしまう。気が付いたら読者であったあなたは住人へと様変わりし、ジャングルの食物連鎖の頂点にたどり着く。

……そんな力オスと幻想の織り成す写真集と書きたいところだが、

どうやら出版の関係で伝説の部分にはストップがかかったようだ。危ない部分は捨象され、綺麗な部分が抽象化された写真集には、これ見よがしにロマンとノスタルジーが流れている。ワイルドからマイルドに味が移された風景を見て思わず「アレ、ココナンニ綺麗ダッタケ」「アレ、ココノヒトコナンニ笑顔ダッタケ」と疑問に思ったそのあなた、噂の真相を確かめる場所は今も開かれてい

る。

すべての道はターミナルに通ず。
大学は通過点だと皆いうけれど、ページを捲ればここは通過駅ではなく終着駅としか思えない。織りなす照明が「地球最後の日か」と思わせるほどの輝きを見せ、そこに映る住人たちの姿格好も、「これから社会に旅立つ若者たち」というよりも、「文明の砂漠から逃げてきた旅人達」という言葉が似合う。そして大学が自分で作り自分で捨てた「自由」も「対話」も「ジャングル」も、この終着駅にたどり着いたようだ。ここには自由のしんどきも、対話のめんどくささも、ジャングルの青臭さも溢れている。

ちなみにこれまた噂だが現在宇宙船化計画が進行中らしい。大学側が確約を廃棄し自分で押した印鑑の有効性すら忘れてしまうほどの低落であるならば、そのあほさ加減に付き合ひ続けるのも限度がある。このあたりで一度惑星間飛行を成し遂げ、神話と自治の底力を見せつけるのもやぶさかではない。どうやら旅の期間は地球時間の一世紀に相当しそうだ。合言葉は「100年後もここに集う」、例え明日地球が滅ぶとも、吉田寮は入寮募集中である。(きもの)

(八〇頁 本体二〇〇〇円 12月刊)

野に在るは賢者か フリーライダーか

在野研究ビギナーズ

勝手に始める研究生活

荒木優太編著

明石書店



諸子百家を集めて

相沢忠洋から小室直樹までの在野の先学を集めた『これからのエリック・ホッファーのために』（東京書籍）は有島武郎研究者・荒木優太を在野研究の唱導者としてその名を一躍高らしめた。現役の研究者を集めた本書『在野研究ビギナーズ』はその続編で、現役の在野研究者を全一四章とインタビュー三件分集めたものである。一読してわかるのは、在野研究者の情報が集約されるハブとして荒木が位置付きつつあるということであろう。記号論や法学からアシナガハエを研究する生物学者（第四章）までを網羅した本書のメンバ―のその考え方はアカデミアでも真似したいだろう。日本政治学史に専門家がほとんどいないこと（第一章）、図書館とコピー規定の今昔（インタビュー）、日本活字史の現在（第五章）など、そもそも本書を読まないで得られない知識も多い。地域おこし協力隊を経験した西周研究者・石井雅巳（第一四章）の現在は評者も知りたかったし、研究支援の専門家の原稿（第一章）は研究者の定義自体を再考させられた。此くの如き陣容に対して評者は褒詞をひねりだすことができなご。

ピアよ何処に

さて、ここでちょっとぶ台を返すようだが、実は評者は本書の、特に荒木の論旨に賛成はしていない。それは研究と出版にかけろ荒木の情熱を疑うからではなく、本書に研究という場を支える最大のインフラ——高等教育への見解が皆無であるからである。我のみ賢い山本哲士の大学不要論（インタビュー2）は脇に置いて、「序」の退屈な学会イメーシはあまりに凡庸だし、アカデミアとビジネスの接続という論点（第一四章）はあっても、在野が既成の学問にどう貢献するか、という論点はやはりない。在野研究者を評価する人——まさしく「ピア」は国費を投じて育成されているのになだ。

これは実は原著にも共通する欠点であり、荒木が学問も制度であるというメタ的な認識を実は徹底的に欠いているところに由来する。荒木が望むと望まざるに関わらず在野研究のイデオロクとして自立化し始めている以上、在野研究の翼賛と「文系いらぬ」の距離は論理的に捷徑であることにはもう少し自覚的になるべきであろう。実は荒木の諸説が本書で評者は一番「ノレ」なかったのだ。

◇ ◇

評者はこの春まで数年間社会人院生の受け入れを設置目的の一つとする研究室に専業学生として身を置いた。本稿は投稿者として長く駄文の掲載を許された本誌へある種の召命として評者が記すものである。「学生」と「社会」の間で揺れ動いた数年は評者が科研究給資格を得ることで決着しつつある。在野となるチャンス振り捨てて行くアカデミアが自由の国ではないのは分かっているが、拙評の真めくらしいは果せるよう精進したい。

（投稿・ついで）

（二九二頁 本体一八〇〇円 9月刊）

〈特集〉

大学的 読書事始め2020

現代の人間はインターネット上の文字情報を多量に摂取している。しかし、その多くはユーザーの好みに合わせて「最適化」されたものであり、見識を広げる役には立たない。それゆえ、視野狭窄を防ぐためには、時折普段と違うものを読み、まったく馴染みのない情報に触れなければならないのだ。その最良の手段は、幅広い読書である。この特集が、さまざまなジャンルの本と出会う機会になれば幸いである。(蕨餅)

莊子全訳注(上・下)

池田知久訳注
講談社学術文庫

目まぐるしく移り変わる毎日に、一步距離を取り、無為の世界に想いを馳せる。「荘子」はそれに最適な書だ。本書は難解な『荘子』に現代語訳や解説を付した全訳注である。「無用の用」「命長ければ恥多し」「井の中の蛙大海を知らず」等、『荘子』由来の言葉の原典に当たることができる。我々に対して、荘子は語る。無為自然^{ありのまま}で「ええやん。京大なんやし。」(上 一一五二頁 本体二五〇〇円)

アリストテレス「哲学のすすめ」

廣川洋一訳・解説
講談社学術文庫

特異な新プラトン主義者イアンプリコスの著作の中から復元された、アリストテレスの幻の公刊著作『哲学のすすめ』。一般庶民に向けて「よく生きるためには哲学すべきである」ことをまさに哲学的に説いた本書は、今後も最良の哲学入門書であり続けるだろう。訳者解説も充実していて、本書の思想的意義やアリストテレス哲学における位置づけもよく分かる。(二一四頁 本体九六〇円)

(出席系/霊人)

わが秘密

ペトラルカ著 近藤恒一訳
岩波文庫

魂の病に苛まれる詩人ペトラルカのもとに顕現した真理の女神に見守られながら交わされる教父アウグスティヌスとの三日にわたる対話。ペトラルカが自分自身のためにのみ執筆した自己省察による自己救済の試み、この極私的な営みはしかし、魂の最内奥において読み手と深く響き合うに違いない。古代と中世の伝統を継承しながらも新たな時代を切り開いた名作。(三四八頁 本体八四〇円)

じゃじゃ馬馴らし

シエイクスピア著
松岡和子訳 ちくま文庫

紳士のペトルーチオが持参金豆当てでじゃじゃ馬娘キャタリーナと結婚し、食べさせない、眠らせないとといった虐待的手法で調教して、従順で貞淑な妻へと飼ひ馴らしていく。ペタに読めば男尊女卑が酷くて喜劇としてはもはや笑うに笑えない筋書きであるものの、逆に多種様々な批判的「読み」を誘発するという意味で、むしろ今こそ読むに値する傑作戯曲。(二二九頁 本体八二〇円)

(霊人)

アメリカのデモクラシー(全四冊)

トクヴィル著 松本礼二訳
岩波文庫

著者はフランスとアメリカを比較しつつ、民主主義の利点やその危険性を論ずる。瞠目すべきは先見の明に富む考察が散見されることだ。例えば被治者の抵抗に遭った政府は暴力が法に訴える。これは現代の世界情勢からも理解できる。他にも選挙制度や民衆と権力のあり方など見所は多い。宇野重規『トクヴィル』講談社学術文庫)を併せて読むと理解が深まるはずだ。(二六四頁 本体九七〇円)

精神現象学(上・下)

G・W・F・ヘーゲル著
熊野純彦訳 ちくま学芸文庫

哲学書とは若い頃背伸びして読むものでもあり、生涯をかけて繰り返し読むものでもある。完璧な理解などしなへていいから、一度出会ってみたい。意識とは何か「自己とは何か」「世界とは何か」。根源的な問いが深められ変化していく。「何度読んでも分からない、しかし読むうちに何かが変わっていく」そんな読書体験が味わえるのも哲学書の醍醐味だ。

(上巻 六七〇頁 本体一七〇〇円)

(下巻 六七〇頁 本体一七〇〇円)

ユダヤ人問題に寄せて

ヘーゲル法哲学批判序説
マルクス著 中山元訳 光文社古典新訳文庫

本書収録の「ユダヤ人問題に寄せて」における主題は、人間の私的領域と公的領域の区別の解消である。この解決を希求するなかで若きマルクスは近代国家と市民社会に内在する矛盾を理論的に抉りだし、人間解放の鍵をプロレタリアートに見出した。その後の思想的発展を予感させる、哲学者にしてジャーナリストであった青年マルクスの批判精神がみえざる名著。(五六二頁 本体一四〇〇円)

職業としての学問

マックス・ウェーバー著
尾高邦雄訳 岩波文庫

確固とした価値が失われた時代において、学問の職分とは何か。第一次大戦後、新たな価値の創出が性急に求められたドイツでウェーバーは説く——教師は指導者ではない、学問は価値判断をすべきではない。それでも絶対的なものを求めるなら、「教会の広くまた温かくひろげられた腕のなかへ戻るがいい」。いま学問を志す者にとっても色あせない、研ぎ澄まされた学問論。(九一頁 本体四六〇円)

(上巻 六七〇頁 本体一七〇〇円)

谷間の百合

バルザック著 石井晴一訳
新潮文庫

バルザックの『人間喜劇』は、当時のフランスの風俗を活写した小説群である。壮大な試みの一部をなす本書もその例に漏れない。しかし、本小説における描写は普遍性を帯びている。フェリックスとモルソフ夫人のプラトニックな恋愛が、男女の揺れ動く内面を見事に描写しているからだ。一九世紀フランスで誕生した、恋愛小説の傑作にして、リアリズム小説の白眉。(五八〇頁 本体七五〇円)

失われた時を求めて(全三巻)

マルセル・ブルースト著
鈴木道彦訳 集英社文庫ヘリテージ

タイトルを聞いたことのある人は多いだろう。長いので読むのを躊躇っていた人に、こんな時こそチャンスである。何をすることも決まっているようないなような束の間の休みの時期、夢見がちな主人公の語る淡く感傷的な日々の生に浸ってほしい。それはきっと今でなければ出来ない体験となるはずだ。今はやがて「失われる」。だが思い出は残るのだから。(第一巻・五〇四頁 本体九〇〇円)

(第二巻・五〇四頁 本体九〇〇円)

アンドロイドは電気羊の夢を見るか？

フィリップ・K・ディック著

浅倉久志訳 ハヤカワ文庫SF

「アンドロイドは電気羊の夢を見るか？」
一見風変わりな問いは、まさに人間の本質を問うものである。「アンドロイド狩り」を生業にする人間。彼が出会うのはあまりにも人間らしいアンドロイドだ。「アンドロイドは子供を生めないわ。それは損失なのかしら？」主人公は、アンドロイドを通して人間を考ええる。映画『ブレードランナー』の原作。

(三二八頁 本体七四〇円)

スカイ・クロラ

森博嗣著

中公文庫

「僕はまだ子供で、ときどき、右手が人を殺す。その代わり、誰かの右手が、僕を殺してくれるだろう。」——永遠の子供、「キルドレ」。彼らは戦闘機に乗り、空を駆ける。その手が掴むのは、武器か、愛か。キルドレを巡る物語が始まる。『すべてがFになる』の森博嗣が手がけ、押井守により映画化された超大作。空を駆けよう。本書を片手に。

(三三六頁 本体五九〇円)

(出席点)

ニュークリア・エイジ

ティム・オブライエン著

村上春樹訳 文春文庫

男は自宅の庭に穴を掘り続ける。来るべき核攻撃から、愛する家族と自身の信念を守るために。主人公は幼い頃から核がもたらす終末に怯え、大学ではその脅威を訴える活動を始めた。やがて仲間と出会い、彼らと共に過激な行動に傾倒していくことになる。核に取りつかれた男の半生と、変動の時代のアメリカが、圧倒的なエネルギーで描かれる。

(六五五頁 本体一〇四五円)

ことり

小川洋子著

朝日文庫

人間の言葉は話せないけれど、小鳥の声を理解し、「小鳥の歌そのもの」で話す兄と、それを理解する弟。「この世の音はお兄さんの耳だけに本当の姿を響かせているのだ」。兄が亡くなったあとも、弟は小鳥のさえずりに耳を澄まし続け、ある真実に辿り着く。「小鳥の歌は全部、愛の歌だ」。ほんとうに美しいものを見つめ続けた「ことりのおじさん」の生涯。

(三二一頁 本体五八〇円)

(はるな／石透)

親指Pの修業時代(上・下)

松浦理英子著

河出文庫

普通の大学生、真野一実。だがある日目が覚めると、足の親指がPマユになっていた！普通だった毎日が変わっていく。付き合っていた彼氏が言うように、Pはほんとうに汚いものなのか？ なぜ自分は女性とのセックスを回避していたのか？ 性の極致はほんとうに性器同士の結合なのか？ ぶっ飛んだ設定ながらもいたって真面目、性の教養小説ここにあり。

(上 三三八頁 本体八六〇円)

苦海浄土 わが水俣病

石牟礼道子著

講談社文庫

詩人・石牟礼道子は、水俣病にもたえる人々の声なき声を感じとり、身体に触れ、魂を重ね、それをことばにしていく。一つ一つの語りはあまりに悲しく、あまりに美しい。一節を読み終える度に、足元はぐらつき、ページをめくる指が止まる。その度に、自分の身体とところを見つめ、思う存分立ち止まればよい。この本はルポルタージュではなく、詩なのだから。

(四二一頁 本体七六〇円)

(三セ／石透)

朱子学と陽明学

島田虔次著
岩波新書

朱子学と陽明学とは何か。本書を読めばそれがわかる。朱子学と陽明学はあくまで「宋学」の一潮流であり、二項対立的に存在するのではない。本書では「性即理」「心即理」等をはじめ、朱子学と陽明学の基本概念について簡明に解説されている。特に「體用」の關係図は後の多くの論文にも引かれるもので参考になる。宋学を志す学生の必読の書。

(二〇八頁 本体七八〇円)

「やさしさ」と日本人

日本精神史入門

竹内整一著 ちくま学芸文庫

あの人はやさしい人だ、など「やさしい」という語は我々が日常的によく使う言葉であるが、考えてみるとわかるようにわからない曖昧な日本語である。本書では古代から現代の書物や、歌詞に出てくる「やさしい」の使用例まで徹底的に調べ上げてその意味の多様性を暴き出している。曖昧にするのではなく、徹底的に調べたいという人にとって本書を薦めたい。

(二五二頁 本体一〇〇〇円)

(出席点/投稿:空)

超限戦

喬良・王湘穂著 劉琦訳
坂井臣之助監修 角川新書

一九九二年、ペルシャ湾岸に吹いた砂漠の嵐の衝撃は、中東でも西側でもなく当時崛起しつつあった中国に衝撃を与えた。春秋戦国の戦訓からサイバネティクスまでを駆使し、冷戦期の重戦力が無力化され前線と後方の区別が消失していく様相を捉えきった本書から、次世代の大国の思考が垣間見える。「中国夢」の前後を彩る物語、待望の新書化。

(三二八頁 本体二二〇〇円)

人間の建設

小林秀雄・岡潔著
新潮文庫

文系と理系、どっちが上か。受験生が一度はしてしまいがちな空疎な議論は、この二冊を読めば全て吹き飛び。京大卒、日本数学史上最大の数学者、岡潔。東大卒、日本史上最大の批評家、小林秀雄。二つの巨星がぶつかりあう「雑談」は真善美への道しるべだ。

「本質は直観と情熱でしよう。」
「そうだと思いますね。」

(一八三頁 本体四三〇円)

(投稿:とつこ/石透)

チベット旅行記(上・下)

河口慧海著
講談社学術文庫

一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、鎖国中のチベットに単独で潜入した者がいた。名を河口慧海。未だ見ぬ経典を求めて三蔵法師の如く旅をしたこの記録は、時代状況、チベット文化を如実に伝えフィクションを超える展開を見せていく。修業とは何か、旅とは何か、世界文学として評価を受ける日本人の旅行記を、一読あれ。

(上 四四八頁 本体二二五〇円)

決定版 日本妖怪大全

妖怪・あの世・神様

水木しげる著 講談社文庫

京都といえは人間だけではなく妖怪たちの街でもある。夜道を一人歩き出せば、有象無象の妖怪たちと遭遇するだろう。恐れる勿れ、妖怪たちは親しみを込めて名前を読んであげれば友達になれる。どんな妖怪がいるか分からない読者は本書をポケットに入れておけばいい。京都大学の学生たるもの妖怪の二匹や二匹使役してないかと格好がつかないぞ。

(九四四頁 本体一九〇〇円)

(きもの)

古代オリエントの宗教

青木健著

講談社現代新書

極めて多様な世界の諸宗教を見晴らす視点を得るのに要となるのは、東洋と西洋の結節点に位置するオリエントの宗教史である。

それゆえ、マンダ教やマニー教、ゾロアスター教スルヴァーン主義、ミトラ信仰、イスマイール派イスラームなど一見マイナーにみえる宗教を分析した本書は、実は宗教思想全般を理解するための頗る有益な補助線を提供している。(一三三頁 本体八六〇円)

モチーフで読む美術史

宮下規久朗著

ちくま文庫

入学を機に新しい趣味を始めてみては？

オススメしたいのが美術鑑賞である。絵を見てわからないからつまらない、そんな人に読んでほしいのが本書である。絵画に描かれている「もの」について項目ごとに説明されている。本書を読めば「何」が「何故」描かれているか読み解くことが出来る。コンパクトにまとまっているので本書を片手にぜひ美術館へ。(二七二頁 本体八八〇円)

(霊人／ね)

「きめ方」の論理

佐伯胖著

ちくま学芸文庫

何かを選択する際、自己の利益を最大化することが前提になっている。しかし人間は社会的動物であるという言葉が示すように、人は他者との結びつきに影響されることもまた事実である。他者と自己の利益を勘案しつつ人は如何に選択しそれが結果にどう反映されるか、元々の単行本が世に出てから四〇年と随分経つが、内容の深さは未だに色褪せない一冊といえる。(四一三頁 本体二〇〇円)

情報理論

甘利俊一著

ちくま学芸文庫

「情報」という言葉は日頃よく使われる。

しかし、それが定量的に扱える「モノ」であることはこの程度知られているだろうか。現代の情報技術の根幹をなす、「情報理論」の入門書である本書は、情報の定量的な取り扱いについて知ることが出来るのみならず、一見捉えどころのない概念を数学的に定式化することの意義や面白さも実感できる一冊だ。

(三五二頁 本体一三〇〇円)

(ね／蔵餅)

私とは何か

「個人」から「分人」へ

平野啓一郎著 講談社現代新書

「本当の自分」とは何だろうか。人の前では「表面的な自分」を演じるけれど、嘘偽りのない「ありのままの自分」も私の中には確かに存在する。筆者はこのような自己観に代わって「分人」という視点を提案する。唯一不変の自分など無く、様々な「分人」から私たちは成り立っているのだ、と。「自分探し」に息苦しさを覚える人に薦めたい一冊。

(一九二頁 本体八一四円)

自閉症の僕が跳びはねる理由

東田直樹著 角川文庫

著者は会話のできない重度の自閉症である

が、筆談によるコミュニケーション方法を手に入れたことで、うまく気持ちを伝えられるようになった。自閉症者の思いを言葉することができるようになった。「何かに突き動かされるように書かずにはいられない」と心の叫びを漏らす著者の言葉は全く「自閉的」ではなく、他者となんとか繋がるように続ける。

(一九〇頁 本体五六〇円)

(はるな／石透)

本を読む本

M・J・アドラー、C・V・ドローレン著

講談社学術文庫

本を読むことなどよく分かっている、と思っていないだろうか。読書と一口に言ってもそこには種類がある。楽しみのために本を消費すること、情報を得るために精読することでは、要求される技術が異なるのだ。古典的名著として知られる本書は、読書の方法論を洗練させ、本を十全に活用するための手引きとして「最適」である。

(二五六頁 本体一〇七〇円)

英文翻訳術

安西徹雄著

ちくま学芸文庫

次の英文を翻訳せよ。This is one of the few good books that have been published on this subject. 「これは、この問題について出版されている少数のよい本の一つである」？受験なら満点だが、翻訳としてはまずい。本書が教えるのは自然な日本語に直す技術だ。「この問題についてはすべからぬ書物はごく僅かしか出ていないが、本書はそのうちの二冊である」。

(二八二頁 本体八八〇円)

(蔵餅/三七)

論より詭弁

反論理的思考のすすめ

香西秀信著 光文社新書

これから先、好むと好まざるに関わらず自分の意見を主張し、意見を異にする相手と議論する場面が数多くあるはずだ。その時にどうすれば相手に自分の意見を飲み込ませられるか、大事なものは詭弁の力だと著者は言う。ついつい我々は論、すなわち正当性を根拠に相手を論破すればいいという固定観念に陥っていないか、読むうちに考えさせられる一冊である。

(一九三頁 本体七〇〇円)

あらためて教養とは

村上陽一郎著

新潮文庫

たぐさんの知識を身につけてそれは何の役に立つのだろうかというのが教養に向けられる疑問の一つである。そんな疑問に対して、教養はそうした幅広い知を通して自分を相対化し「自分」という確固たる枠を造り上げ、この困難な時代を生き抜くために必要不可欠なものであると本書は答える。教養を身につけやすい大学時代だからこそ本書を全ての新入生に薦めたい。

(三〇七頁 本体五五〇円)

(わこ/投稿・空)

大学とは何か

吉見俊哉著

岩波新書

大学に入ったからといって、それが何であるかは分からないのが普通だ。この問いに答えるためには、「大学」の誕生から現在に至るまでの経緯を知ることが必要となる。大学という制度をめぐる歴史を概観し、そのあり方を考察した本書は、高校までの「生徒」とは違う、「学生」としての見識を得るための手掛かりとして貴重な一冊である。

(二六四頁 本体八六〇円)

研究不正

黒木登志夫著

中公新書

研究不正という二部(悪い)人がするものというイメージがあるかもしれない。しかし、どんな研究者にとっても、研究不正は他人事ではない。データをきれいに見せるために画像を改竄する、作業仮説に合わせるデータを事前に「仮置き」するなど、研究者に不正への誘惑は多い。研究に携わることに緊張感を抱かせてくれる一冊。

(三〇二頁 本体八八〇円)

(蔵餅/投稿・のし梅)

新刊コーナー

フアンサー
房思琪の初恋の楽園林奕含著
泉京鹿訳
白水社

「これは美話を
もとにした小説で

ある」——本書の
刊行二か月後に自
殺した著者林奕含

の言葉は、台湾中でセンセーションを巻き起こした。甘やかなタイトルに反して、内容は重い。これは、レイプされた少女の物語だ。

文学好きな二三歳の少女・房思琪は、同じマンションに住む博覧強記の塾講師をひそかに恋していた。彼女の隣にはいつも、「魂のふたご」の劉怡婷。上の階には、文学を読み聞かせてくれる伊紋姉さん。穏やかな毎日、塾講師にレイプされたその日から裏返しになる。思琪は言い聞かせる。自分は先生を好きだったのだし、先生も自分を愛しているというのだから、問題ない。「邪悪はこんなふう

に平凡で、平凡はこんなふう

に愛することは難しい」。高校に進学してからレイプは続き、悪夢にうなされ記憶が飛ぶようになり、事情を知らない「魂のふたご」怡婷にも愛想をつかされる。思琪の心と体は縫い目をほどかれ、はらばらになった。心神喪失になった思琪の日記を読んでも、心を知った怡婷に、伊紋は語りかける。「世界にはマカロンと、ハンドドリッパーコーヒーと輸入文房具しかないと思いつくこともできる」。著者がこれは美話だと強調するのは、そんなふうにしてほしくないからだろう。

思琪の苦しみが本当だと伝えたいからだろう。小説中に張りつめた痛みを読者は現実を持ち帰って、向きあわねばならないのだ。(ミセ)

(二七三頁 本体二〇〇〇円 10月刊)

息吹

テッド・チャン著

大森望訳
早川書房

見逃すな。聞き逃すな。彼の息吹を見逃すな。聞き逃すな。彼のメッセージを。

テッド・チャン。彼は第一短編集『あなたの人生の物語』で知られるSF作家だ。同名の短編は『メッセージ』という題で映画化さ

れた。二〇〇二年に『あなたの人生の物語』で世界を騒がせてから一六年。ついに新作第二短編集である『息吹』が刊行されたのだ。

『千夜一夜物語』の枠組みを使い、科学的にあり得るタイムトラベルを描いた「商人と錬金術師の門」をはじめとして、九篇を収録している。AI、自由意志、言語、神など知性の極限を追求する、テッド・チャン作品のエッセンスが凝縮された作品群となっている。注目に値するのは、SFのガジェットの中に見え隠れする人間性だ。機械やAIなど、一人人間とはかけ離れたものを描きながらも、その中にヒューマニティを見ることができ。それは前作『あなたの人生の物語』から引き継ぐテッド・チャンの持ち味だろう。そのため、ハードなSFが苦手だ、あるいはこれからSFを読み始めたいという読者にも十分オススメできる。

『あなたの人生の物語』から『息吹』まで長い時間がかかった。十数年待たされたからこそ、ファンの期待もまた大きい。「今」この時代に、テッド・チャンが描く「未来」とは何か。「人間性」とは何か。予測できないくらいこそ目が離せない。見逃すな。聞き逃すな。彼の息吹を見逃すな。聞き逃すな。彼のメッセージを。

(四三三頁 本体一九〇〇円 12月刊)

(出席点)

欧米人の見た開国期日本 異文化としての庶民生活

石川榮吉著
角川ソフィア文庫



最近ではコロナウィルスの影響で、少し減少気味だが、京都にはそれこそ大挙して外国人がやってくる。彼らはきつと自分たちの国にはない「日本らしい」ものを求めて来ているのだろう。だが、その「日本らしさ」や日本という異文化について彼らはどう思っているのだろうか？

かつて外国人が日本人をどう見ていたのか、本書は江戸末期から明治期にかけて、開国後に日本を訪れた外国人による日本観察記を紹介してくれる。日本人の「つり目」の容姿やお歯黒などの風習、裸体に対する羞恥心のなさや性風俗、日常生活のあれこれが記されている。出典元の資料を著わしたのは外交官やその周辺の人々、どちらかといえば身分の高い地位にあり、市井の人々との接触の機会には限られていて、それゆえ踏み込んだ観察にまで至っていない部分が多い。しかしそれゆえに、日本という異文化の表層を撫でた

彼らの素朴で時には嫌悪を込めた反応と、そこから窺える彼ら自身の価値観を読み取るのも我々にとっては面白いところだ。

前述の「つり目」は今でも欧米で、日本人や広くアジア人を指す特徴として捉えられ、場合によっては差別的な意味も含まれているようだ。本書に挙げられている多くの特徴は「外国人による日本人観」の典型例として我々自身お馴染みになっており、時代の差ゆえに隔世の感を覚えるものも多いのだが、外からの視点として、改めて参照するのにふさわしい一冊ではなからうか。(ねこ)

(三〇四頁 本体九六〇円 9月刊)

すごい物理学講義

カルロ・ロヴェッリ著
竹内薫監訳 栗原俊秀訳
河出文庫



この世界には法則性があるという見解がなければ、杞憂のために思考や行動を行うことは難しい。それゆえ、およそ誰でも、何らかの世界観をもって生きている。現代人にとって、世界観の供給源として重要なのは科学、

特に物理学の知見である。しかし、それは数学の言語を用いて表現されているため、誰しもが馴染めるものではない。

現代物理学の世界観を、数学ではなく詩的な言語を用いて語る本書は、この世界がどうできているのかを想像してみたいなら、誰でも楽しめる一冊である。内容はまさに物理学の歴史の要約である。古代の自然哲学に始まり、一九世紀までの古典的な物理学について概観したのち、量子力学と相対性理論という現代物理学の柱を紹介する。そして、それらの間の対立を解決するため量子重力理論を導入する。つねに目的とされるのは、各理論での「世界観」を紹介することである。それゆえ、数式ではなくアナロジーによる、詩的な言語を用いて説明される。もちろん、こうした述べ方は、「科学」の本としては主観的過ぎる。しかし、世界観を伝えることが目的ならば、これほど効果的な方法はないだろう。物理学に詳しい読者にとっては、あまり類書で見かけることのないループ量子重力理論について述べられている点も興味深いものと思われる。

物理学というよりも、この世の仕組みを述べたという方がふさわしい雰囲気を持つ、極めて刺激的な一冊である。(蔵餅)

(三八四頁 本体九八〇円 12月刊)

この国の不寛容の果てに 相模原事件と私たちの時代

兩宮処凜編著
大月書店



相模原障害者施設殺傷事件から四年弱が経つ。世界中に衝撃を与えた事件だが、「とうとう起きてしまった」と感じた人は少なからずあったろう。「生産性がない」「迷惑」……

「内なる植松」は誰の心にも巣食う。

植松被告は増え続ける社会保障費に対する危機感を訴えている。著者の兩宮処凜はそれを聞き、ロスジェネ世代の団塊の世代に対する剝奪感が思い浮かんだという。一九七五年に生まれ、フリーターや右翼活動家を経て作家になった著者は、植松被告の気持ちが一歩だけ分かる」と告白する。「きっと自分のことが好きじゃなかったんだろうな、と。」

それでも、「命の選別を許さない」と呼び続けるために、著者は六名の論者と語り合う。自閉症の息子を持つ記者・神戸金史。脳性麻痺の当事者であり、当事者研究をリードする小児科医・熊谷晋一郎。ファクトを重んじる医療記者・岩永直子。フリーターや障害者へ

ルパーを経た批評家・杉田俊介。ホームレス状態の人の支援を続け、対話の重要性を説く精神科医・森川すいめい。当事者研究を産んだ「べてるの家」のソーシャルワーカー・向谷地生良。それぞれの現場で真摯に病や障害に向き合ってきた彼らと著者は、植松被告の行為や思想を決して認めようとしなが、他者化しようともしない。

あなたは植松被告に会った時、何を語ろうとするだろうか。その言葉は自分自身の弱さを曝け出す。あなたも、私も、互いにその弱さを認めあった先に未来がある。(石透)

(二七二頁 本体一六〇〇円 9月刊)

21世紀の啓蒙(上下)

理性・科学、ヒューマニズム、進歩
ステイブン・ピンカー著
橋明美・坂田雪子訳 草思社



人類は果たして正しい方向に向かっているのか、或いはゆっくりと破滅へと進んでいるのかを考えたときに、あなたならどちらを支持するだろうか？

政治を見るとポピュリズムや自国中心主義

が世界で勢いを増している。万人が豊かになるはずが格差は拡大し、環境問題も一向に解決の兆しが見えない。増え続ける人口にどう対応するかに頭を抱え、テロリズムの脅威に怯え、客観的に見れば幸せなはずの人々は鬱病に苦しむ。そんな言説が大きな声で語られていることもあり、後者の見方を取る人は少なくなない。

本書の著者ステイブン・ピンカーによると、このような問題だらけの現代社会像はあまりにも悲観的すぎる。そして、啓蒙主義や進歩が勝ち取ってきた成果にもっと目を向けるべきだと説く。平均寿命、貧困、平和や安全……。人類にとって重要な指標や統計を取り上げてみると、そのほとんどが改善されてきたことに気がつく。もちろん、依然として課題が山積しているのは事実だが、人間はよりよい生存を志向することができるし、今までもそうしてきたことを歴史や客観的なデータでもって再認識する必要がある。その上で、我々は望ましい世界の実現に向けた努力を続けるべきだ、と著者は説いている。

諦念や閉塞感を抱えた現代人にとっての新しい希望の書は、本作かもしれない。そう思わせるほど前向きで力強いメッセージが込められている。(はるな)

(上 四七三頁 本体二七五〇円 12月刊)

中田重治とその時代 今日への継承・教訓・警告

中村敏著
いのちのことば社



日本ホーリネス
教会の初代監督、
中田重治の評伝で
ある。教派的に日
本キリスト教史に

おいて傍流とみなされがちだが、主に知識階級の信徒によって構成されてきた日本のプロテスタント界にあって、一貫して一般大衆に伝道を行い、約二万名の信徒を擁するまでに成長したホーリネス教会と、そのカリスマ的指導者であった中田の歴史的意義は大きい。本書は史料や先行研究が効果的に引用され、中田の人物像や、彼をとりまく人々や時代との関係性が丁寧に記述されている。

ホーリネス教会の信仰は「新生・聖化・神癒・再臨」を四重の福音とするものだ。その再臨信仰は大正期の内村鑑三らとの再臨運動が一段落ついてもなお切迫感を増していく。デイスペンション主義（本誌三七七八号参照）に基づき、すべてを投げ捨ててひたすらキリストの再臨とそれに先立つイスラエルの回復のために祈ることを求める中田の方針は、

中田が院長を務めていた聖書学院の教授らの離反を生み、遂に教会は分離する。日猶同祖論に立脚し、日本民族はイスラエル再建の使命をもつという中田独特の愛国主義は綱領として八紘一字を謳うまでに至るが、中田の死後、その過激な再臨信仰が国体に反するとして弾圧され、殉教者を生んだ。

日猶同祖論にまつわる真理と解釈の問題、トランプ政権とも深く関わるクリスチャン・シオニズム、また愛国主義などについての著者の考察は、「その時代」が今「この時代」でもあることを思い知らしめる。（霊人）
（二八八頁 本体二八〇〇円 11月刊）

追想にあらず

1969年からのメッセージ

三浦俊一編
講談社エディトリアル

共産主義者同盟
赤軍派の元議長で
あった塩見孝也の
死をきっかけとし
た、かつての同志



たちによる総括のアンソロジーである。セクト内の細々とした人間関係や個々の闘争が詳しい説明抜きに綴られていくので、前提知識

に乏しい読者は塩見の『赤軍派始末記』などをあらかじめ読んでおくことよい。

執筆者は数多く、その論調は様々だが、ひとつの焦点は一九六九年の〈7・6〉事件である。第二次フランクの内村鑑三を中心とする左派フランクが、フロント中央のさらぎ徳二議長らを襲撃し、突発的にリンチへと展開し、破防法で指名手配されていたさらぎを逮捕させてしまう。これにより第二次フロントは崩壊し、左派フランクは赤軍派を結成する。この事件の総括の失敗が、後の運動に諸々の悪影響をもたらしたと自己批判されている。

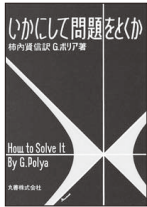
多士済々の著述を続けて読めば、あたかも多元焦点化の物語のように、〈10・8〉羽田闘争や〈7・6〉事件、〈よど号〉ハイジャック闘争などの数々の闘争や互いの人物像、それらを包み込むひとつの革命的な時代が立体的に浮かび上がってくる。新左翼運動に関心を抱く京大生にとっては関西フロントから赤軍派へと至る系譜こそ今もなお避けては通れない参照軸であるが、主要な関係者が多数寄稿している本書はその意味で必読である。ちなみに当時の赤軍派関連の機関誌はほぼ全てウェブ上で読むことができる。政治過程論や過渡期世界論などの重要な原典を併読することを強く勧める。（霊人）

（六五三頁 本体一八〇〇円 12月刊）

問題解決の手引

生きていれば、よほどの幸運に恵まれていない限り、望みどおりにいかないことがある。このような場合、あり得る対応は大きく分けて二通りだろう。不運であったとして諦めるか、その状況を「問題」としてとらえ、解決を図るかのどちらかである。「運命を受け入れる」ことはたやすい。一方、問題解決を行うことは努力と忍耐を要する。それゆえ、自分には無理だと思っ、諦めてしまおう人が多いのではないだろうか。しかし、問題解決とはその方法論が存在する「技術」であり、だれでもその能力を鍛えることが可能なのである。もちろん、これには練習が必要だが、いざというときのために備えておいても悪くはないだろう。そこで、今回はそうした問題解決のための手引きとなる書物を紹介しよう。

さて、問題解決を練習するとはどういうことだろうか。それは、小さく単純な問題の解決を数多く試みて、着眼点についての勘を育むことに他ならない。そうすることにより、現実世界で遭遇する大きく複雑な課題に対しても、何らかのアプローチを思いつけるようになるわけである。こうした練習に極めて有用な素材を提供してくれるのが数学である。数学とは、本質的に何らかの構造を考察したものであるから、そこでのノウハウは質かなり応用が効く。それゆえ、数学についての記述が主である『いかにして問題をとくか』（丸善出版）が、問題解決の方法について述べた名著とされるのも、それほど驚くべきことではない。本書で目標とされるのは問題解決のプロセスを身に着けることである。すなわち、問題を理解し、計画を



立て、それを実行し、結果を振り返るという手順を確実に踏めるようになることである。このための問題集も付属しているが、やや数が少ない。そこでさらに練習を行うためにおすすめなのが『エリガントな問題解決』（オライリー・ジャパン）である。本書もやはり数学的な問題解決法を解説した書物であるが、実際に解いてみて学ぶことを方針としている。問題の難易度こそ高いが、基本的には高校数学までの知識があれば十分に利用できるはずだ。

ここまでに紹介した本を読みこめば、問題解決者としての能力は飛躍的に向上しているはずである。数学的な問題のように、構造のはっきりした問題ならうまく対処できるはずだ。しかし、現実世界の問題はそれほど分かりやすいものではない。解決策の立案はおろか、問題の理解すら難しいこともある。そこで有用なのが、『問題解決大全』（フォレスト出版）である。本書は、問題解決のプロセスの各段階において有用な技法を、人文学から自然科学まで様々な学問から集めた書籍である。紹介される各技法は試すべき状況がそれぞれ異なっているため、これは教科書というよりは道具箱に近い性格を持った書物である。それゆえ、一読してどこに何が述べられているかを把握しておく活用しやすいものと思われる。技法の出自についての記述も非常に興味深く、読み物としても楽しめる一冊である。

問題解決について学ぶことは、いざというときの備えではあるが、「転ばぬ先の杖」ではない。それは慣れた時に起き上がる方法を考へておくことに等しい。ここで紹介した本が、転ぶことを恐れずに歩くための一助となれば幸いである。

（藤餅）

独のびとフアン、共に生きる

昨年ノーベル文学賞を受賞したオーストリアの作家、ペーター・ハントケ。日本ではヴェンダースの『ベルリン・天使の詩』の脚本を書いたことで有名だが、彼はヒロインのマリオンの愛の告白をする場面で、このような台詞を語らせている。「独りでいても、誰かといっても、あたし、孤独だったことはない。孤独をかんじてみたかった。だって、孤独って自分をまるごとかんじることだもの」（池田香代子訳）。一風変わった告白のキーワードとなる「孤独」を手がかりに、ハントケの文学を読み解いてみよう。

孤独な人びとの集い

女は三〇歳。陶器会社に勤める夫と子ども三人で、別荘風の家が立ち並ぶ住宅街に暮らしていた。何不自由のない生活。しかし彼女はある日、夫に別れを告げる。『左ききの女』（同学社）では、女と夫を中心にさまざまな人物の孤独が描かれる。女は夫と別れたあと、翻訳の仕事をはじめ。彼女が訳した文章が、彼女の心境を物語る。「理想の国で。私が私であるゆえに、そして私が私になっていくゆえに愛してくれる男がいたらいい」。初めは彼女を理解できず憤慨していた夫はつづやく。「昨日はもう一つ、ぼくが君なしでいる日を数えるのをやめたことに気がついた」。教師をやっている女友たちは吐き捨てる。「孤独はひやっとするような、むかむかするような痛みを呼ぶわ」。小説の終盤には、こうした孤独な者たちが女の家で一堂に会する。互いに言葉を交わし談笑するが、それでも静かで、うら寂しい。涙を涙として、どこか心地よい。



孤独、性愛、孤独

『ドン・フアン（本人が語る）』（三修社）では、女たらしのイメージとは異なるドン・フアンが描かれる。よく晴れた五月のある日、「私」のもとにドン・フアンが転がりこんできて、自分の来し方を語りはじめ。彼は多くの女と関係を持っていたが、分ってしまった数を数えない。そして自分の欲望ではなく、女の欲望を解き放つ。「女は、彼女に向けられ、さらに彼女の周囲に向けられたドン・フアンの眼差しによって、自分がそれまで孤独だったこと、だが自分はこの孤独をこの場で終わらせるのだということに自覚した」。『ベルリン・天使の詩』のマリオンは愛の成就とともに孤独を感じたがここでは孤独を終わらせるものとして性愛が現れる。ドン・フアンと女は、つかの間二人になる。ところがドン・フアンはまもなく女のもとを去る。二人は別れて、また一人と一人に戻るのだ。

『アララフエスの麗しき日々——夏のダイアローグ』（論創社）では、『ドン・フアン』とは逆に、女が男との過去の体験について語る。構図こそ違ふものの、ここでの性愛も『ドン・フアン』と同様に、人を孤独から解放するものだった。それからたちまち女の心は離れる。「彼から離れるわけでもなく、わたしはその場で彼の女であることをやめるの。さようならを言うわけではないけれど、それはさようならなの」。孤独があっても性愛があり、再び孤独へ。その孤独のなんと軽やかなことか。ハントケの文学は、愛と密に結びあったものとしての孤独の諸相を教えてくれる。



編集後記

来月号で編集委員の任を退くことにした。私のペンネームの由来であるレーニン『国家と革命』の冒頭で、ブルジョワジーや日和見主義者たちが、死んだ革命家（マルクス）を聖人あるいは偶像として祭り上げながら、その学説の革命性を骨抜きにすることを鋭く批判している。私が憂懼したのは、書評を書く際に意図せずしてその愚に陥ることだ。それはまさにキリスト教的な意味で罪だといえよう。私を導いたのは書物に宿る霊と、それに対する一種の使徒的使命であった。私は十分に霊に満たされていただろうか。（霊人）

モロイです。来年度から社会人の末席に名を連ねることになり、4月号を最後に『綴葉』を離れます。本誌編集委員として過ごしたこの1年半、優秀な方々と一緒にできたことは私にとって何よりの僥倖でした。

また、私の書評を読んでくださった読者の方々と、業務を通じて関わった皆様に御礼申し上げます。私自身は最後まで情けない限りですが、今後とも『綴葉』をよろしく願っています。（モロイ）

当てよう！ 図書カード

あまり知られていないことですが、いわゆるモーセの「十戒」はキリスト教の教派によって数え方が微妙に異なります。では、その中で「汝その隣人の妻を食するなかれ」の一つの戒めとして数える教派はどれでしょうか。

1. カトリック
2. ルーテル派
3. 聖公会
4. 改革派

（霊人）

《応募方法》 読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください（または e-mail:teiyo@s-coop.net）。正解者の中から抽選で5名の方に図書カードを進呈いたします。締切りは4月15日です。

3月号の解答

11月号の「現行憲法下で制定された祝日の中で最も古くからあるのは？」の解答は、2. 文化の日でした。古くは明治期の天長節（天皇誕生日）に遡るものなんだそうです。応募者10名中10名の方が正解。図書カードの当選者は、豆単さん、山茶花さん、黒小町さん、Sosoさん、朝知流さん（順不同）です。おめでとうございます。（ねこ）

読者からひびく

〇惹かれた書評を切り取って、さながら積ん読のように残しています。本選の指針として頼りにしております！（文・いよし）

〇いつも愛読いただきありがとうございます。今後とも、ご参考にしていただけたら書評ができるよう、努めてまいります。

〇読んだ本に対して、面白かったところ、どう考えたかなどをメモするノートを作った。ようやく五〇冊に達したのだが、書評らしいものを書くことは難しい。（工・豆単）

〇読書ノートがそれほどこの冊数になるほど本を読んでもいらっしやるのは、とても凄いことだと思えます。書評はその本を薦めたい「読者」の姿さえ想定できれば、あとは書き方の問題だけで、それほど難しくありません。何か良い本がありましたら、ぜひご投稿ください。

〇らいふすてーじに『綴葉』が載っていますね。『綴葉』の存在がもっと多くの人に周知されると嬉しいです。（工・Soso）

〇『綴葉』の冊子の捌け方はますますなのですが、「新規顧客」の開拓という点ではまだ課題がありそうです。PRの方法についても検討していきたいと思えます。（麻餅）